

形象と喩

長 野 隆

1

爪

石の上の搔痕。

(北川冬彦)

詩学的空間を育みながら「人為」を端的に語りかけた言葉だ。意味の了解がやうく均衡をとり戻し、気付かぬ内に詩をつくりあげたものだ。「今」を支えるすべての思想が遺恨となつて時間の中に封じ込まれている。神話に語らせてきた被造世界の寓意を、造作なく人は手中にしたのだ。「石」の無骨な歴史は「搔痕」によつて捨象され、代りに全く固有の歴史が封印されたのである。

絶対者(造物主)の下に忍従する様々な具象。或る神秘的な連続の内に生きるすべてのもの。彼等は「恵み」の逆説として従属を強要され、「自然」という了解とその地平の上に肩を並べてきた。彼

等の永遠の沈黙と宿命的な生命とは、光と闇の周期運動を小気味よく受容してきたのだ。水と火と大地と空と同様に彼等は存続するだろう。全く汚れない犯し難い摂理に守られて。
だが、

爪

石の上の搔痕。

彼等の沈黙は破られたのだ。

原始的な感性が今も尊重されるならば、一つの名辭がそのもの(具象)を指示するという約束の背景に、そのものの誕生に由来する神話が存在しなければならない。一方は存在原理として、一方は認識原理として。意味を直観するとは、この二つの神話の中に入ることだ。

ものの生成に関与する諸々の偶然を、我々はものを知ることによつて忘却する。それは丁度「意味」を暗黙の内に捨てる行為だ。そ

のとき「もの」は一つの「かたち」となり、「かたち」を了解するのだ。しかも、了解は空々しく我々を充足させる。

例えば、机上にあつらえた林檎と花瓶。この二通りの静物に注がれる神と人の眼差し。その眼差しを見たのは詩人だけだ。

いま、人の手によってもぎとられた「自然」が机上にある。禁断の木の実が机上にあるのだ。「静物」は自然のミニアチュールとなっていて、大いなる意味を付与された。また、神の庇護を許さない「形象」が机上にある。自然とは無縁の静物が机上にあるのだ。新しい歴史の重みを支えるだけのささやかな存在が。

爪

人為という一瞬の覚醒が歴史を塗り変えてしまった。沈黙の石（自然）は、人との契約を強いられたのである。

*

人為という手垢のついた形像の数々。それら人工物の機能の沈黙

と実在。唯一物質感だけを装いとし、言葉無く形象の中に沈潜している。神の庇護なく隷属する彼等にとって、連続しているのは、あの永遠の倦怠と焦燥だけだ。彼等は時間からの解放と「人」からの自立を知らない。涙ぐましい人の意匠を一身に受けて、永遠に熟成し続けるのだ。彼等は、いわば物質的恍惚の内に、雨垂の音を聴き光を浴するのだ。

物體

私がかもし物體であらうとも、神は再度朗らかに笑ひはしない。
ああ、琴の音が聴えて来る。——小さな一つの倫理^{モラル}が、喪失してしまつたのだ。
(朔太郎)

条理の喪失は、「意味」の復活を言うのだ。詩人は一向にためらってはいない。

わたしたちは口にすぎぬ。あらゆる事物のただ中にすこやかに宿っている遠いところをだれが歌うのか。

(リルケ)

一体、詩人は詩を書いたのか、詩学を述べようとしたのか。

*

造形物(テクノイド)に形などない。形する意匠だけが形の中に生きのびているだけだ。この形象とは、形の内包であつて形自体ではないもの。それはさながらに観念でありながら現実の磁場に据えられたもの、或いは、具体を抽象する際の認識原理を言うのだ。

造形物がその尊大な機能を我々の前に誇示するのは、我々との有機的なつながりを承知しているからだ。「形」を境界に、元より、関係の張力だけがそれを支えている。

そうなのだ。この荒れ果てた部屋、永遠の倦怠の宿るこの住処は、これこそ僕の住処なのだ。ここにあるものは、塵まみれの、磨りへった、愚かしい家具。煤もなく、喀痰に汚れた暖炉。雨滴が埃の上にしみの痕をつけた悲しい窓。

詩人は屈服する。「形」の前にさじを投げるのだ。

墓場のものであれ、部屋のものであれ、指輪を留め金を、壺を讀えるがよい。

(リルケ)

されば一つの家具を、茶器を、花瓶を、書物を、果物を、椅子を、その適合するやはらかな光線の下に置け。恐らくは君の

生涯の中での、最も奥床しき冥想が鑑賞されるであらう。……

（朔太郎）

個物の形象が、もつれ合い、響き合つて詩人達を包み込む。かつてそれら形姿に刻み付けた諸々の悪意が、呪文のようににはね返つてくるのだ。それは、確かに、何かを訴えかける執拗な粘強さで自らの存在を我々に示そうとしている。

2

また、彼は誘惑する。最も消極的な形態をとりつつ我々を近づけないのだ。唯一課された脆弱な掟だけで自己を全うするのだ。我々はバンドラの過ちを敢えて犯そうとはしない。

我々は事物の「場」を「箱」に求め、「箱」を創造した。結果、「箱」は自立し、「場」とともに君臨したのだ。「箱」の中に「箱」があり、またその中に「箱」がある。こうした空間の罫を、人は容易に取払うことはできない。「場」の提示が「箱」の内に約束されている限り、「箱」は自在な重みを有するのだ。

閉じられた空間が無言の意志を投げかける。彼はすでに固有の空間を占有し、外（自然）との隔絶を宣言した。

「箱」のこの逆説的な抵抗は、みごとに人を威圧する。確かに予期もしなかった不安が、この時、人に押寄せてくるのだ。やむなく我々は次のような終止符を打つ。

「〇〇在中」及び「空箱」

表示がそれを刻印し、凝結していた空間は、自然を取戻すのだ。最早「箱」の実在は言葉（表示）の背後に隠れ、人は敢えてそれを願ひようとはしない。

*

家

人が家の中に住んでるのは、地上の悲しい風景である。

（朔太郎）

この地上に散在する無数の人工物の基底をなすのが「家」だ。「家」は「箱」などよりは遙か以前に——恐らく最も早く——その存在を確立した。それは、自然の地平に肩を並べる、他とは全く異った一個の自然として、「人為」による記念すべき事物を代表する。それは「人為」というものが初めて意味づけられた遠い時点から幾千年にもわたる夢想の一切を、ひたすら内側へと秘め堪えてきた。絶対者の眼の届かない過小な存在空間を、人は「家」に求めたのだ。我々はかつてないほどの自由の「場」を慈しみ、育て上げ、尊大な意味を与えてきた。歴史の中で、その小空間は、所有者の趣くままに分割され、或る時は補足され、夢想の断念のない脹みに応じて幾層となく積上げられた。

「家」は、確かに反自然の明確な秩序を、その普通名詞とともに得ることができた。「個」なるものの、基調とすべき姿だ。

だが、それは所詮「小箱」に与えた尊厳に過ぎない。詩人は、いわば盆景の中に「家」を見たのだ。反自然のメカニズムと汎神論の了解とが「家」の悲壮をつくり上げる。

触手ある空間

宿命的なる東洋の建築は、その屋根の下で忍従しながら、薨に於て怒り立つてゐる。

（朔太郎）

「屋根」と「薨」に於て暗示される「空間への触手」は、自然に屹立する「家」の宿命的な形象だ。その未曾有の内部空間の質量に押し上げられて、「家」が更に「塔」を形造るとき、決定的な終末が訪れる。それは「家」の末期的な形態となり、また悲壮な結論となる。偉大なる「塔」（テクノイド）は、その内部質量と形姿に於て、明らかに「山」（ネイチュア）を凌ぐものだ。

*

窓

開かれた窓を外から眺め込む人は、しまった窓を見つめている人ほどに、多くのものを見ているわけでは決してない。蠟燭の光に照らされた窓ほど、深遠で、神秘的で、豊かで、暗鬱で、輝かしいものは他にはない。白日の下に見ることのできるものは、常に、硝子窓の向う側で起っている事柄ほど、興味をそそりはない。この暗い、或いはまばゆい穴の中に、生が息づき、生が夢み、生が悶えている。……（ボードレール）

閉じた〈窓〉の内側には、暗緑の詩人（イメージ）の住処（スベース）があるだけだ。

内部に居る人が畸形な病人に見える理由

わたしは窓かけのれいすのかけに立つて居ります、

それがわたくしの顔をうすばんやりと見せる理由です。

わたしは手に遠めがねをもつて居ります、

それでわたくしは、ずっと遠いところを見て居ります、

につける製の犬だの羊だの、

あたまのはげた子供たちの歩いてゐる林をみて居ります、

それらがわたくしの瞳を、いくらかすすんでみせる理由です。

わたしはけききやべつの皿を喰べすぎました、

そのうへこの窓硝子は非常に粗製です、

それがわたくしの顔をこんなに甚だしく歪んで見せる理由です。

じつさいのところを言へば、

わたくしは健康すぎるぐらゐなものです、

それだのに、なんだつて君は、そこで私をみつめてゐる。

なんだつてそんなに薄気味わるく笑つてゐる。

おお、もちろん、わたくしの腰から下ならば、

そのへんがはつきりしないといふならば、

いくらか馬鹿げた疑問であるが、

もちろん、つまり、この青白い窓の壁にそうて、

（朔太郎）

つまり、詩人は一時に二つの空間（自然）を〈窓〉を通して眺め

る。〈窓〉は開かれることなく、常に覗かれるのだ。相反する密度を有した二つの空間が、出合いのないうまゝ〈窓〉で交流し、中和する。それは陸（場）を分つ大いなる河のように、全くいぜんに、しかもいづれの側にも無関心に存在し得るのだ。それは最も婉曲的な在り方で「内」と「外」とを連絡する。

例えば〈窓〉の内側にカーテンが設けられ、外に兩戸が備えつけられる。明暗のコントラストがイニシエーションを妨げるとき、

〈窓〉はその消極的な機能を補正されるのだ。

〈窓〉は〈戸〉ほどに我々を威圧しない。

* * *

「密室」は、実存を止揚する最も手頃なスペースである。それは封じられた〈箱〉であり、門戸を閉ざした〈家〉である。生活の無為な営みの中で、「密室」は突然我々を捉える。「鍵」が無い。「戸」があかない。壁と床と天井が世界を遮る。我々は、いわば合法的に反自然の中へ追いやられる。我々は化石にされるのだ。時間は自律する術を忘れて、いちずに空間へと溶解する。すべての有機的な律動が「無」に帰するのだ。我々は正に「形象」の直中に立つのだ。

我々は寓意と喩によつて自らをさらされる。かつて善良であった「意味」が捨象され、今や悪意に充ちた逆説の縁に立っていることを知らされる。いわば通路のない空間（世界）の一方で、突然眼覚めるのだ。

（未完）

註、引用の邦訳文は、福永武彦（ボードレール）、山本定祐（リ

ルケ）、両氏のものを用いた。